

テスへの手紙3章「良いわざへの励まし」

1A 権威への服従 1-2

2A 神の憐れみによる救い 3-7

1B 御霊の洗い 3-5

2B 恵みによる義 6-7

3A 分派への戒め 8-11

4A 働き人の旅 12-15

本文

テスへの手紙3章を開いてください。私たちはテモテへ手紙、そしてテスへの手紙で、敬虔にかなう教えを学んできています。それは、とても实际的で、教会が神の家族であることを意識しているものでした。テス2章では、年配の男性に対して自分を制するように、むしろ信仰と愛と忍耐において健全であるように教えていました。年配の女性に対しては、中傷をしないように、神に仕えているものにふさわしくしなさいと教えていました。さらに若い女の人たちに年配の女の人を教えることができます。家庭を大事にして、夫に従順であることです。それから、若い男たちには、思慮深くあるように教えました。テス自身も若者なので、非難されることのない健全なことばを用いなさいと教えています。さらに、奴隷の身分の人たちには、主人によく従いなさいと教えています。そのことによって、「私たちの救い主である神の教えを飾るようになるため」と言っていました(2:10)。

1A 権威への服従 1-2

こうやって見ていくと、よく従っていくことが、良い行いとつながっており、私たちが神によって救われたことを、証していくことができるのです。それで3章の初めに次の勧めがあります。

¹ あなたは人々に注意を与えて、その人々が、支配者たちと権威者たちに服し、従い、すべての良いわざを進んでする者となるようにしなさい。

ここでは、支配者や権威者に服して、従っていくことの中で、良いわざを進んで行うことができるのだという勧めです。クレテ人は、反抗的なことで有名でした。おそらく、暴動や反乱も試みていたのではないかと思います。私たちも日本において、今の日本政府のしていること、役所のしていることで気に入らないことがいろいろあると思います。そして、日本は民主主義の国ですから、国民が色々な意見を言うことは、むしろ義務です。けれども、キリスト者として、教会としては、そうではありません。ロマ 13 章 1 節に、「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」とあるからです。神によって立てられているのです。

神によって立てられているからといって、すべて良いことをしているとは限りません。けれども、もし権威に反抗したらどうなるでしょうか？神が悪を制するために置かれた権威を取り除くので、上の権威を憎み、自分こそが神であるかのように高ぶるサタンの影響下に自ら置くようになるのです。イエス様を思い出してください。十字架刑は決して、人道的なものではありません。しかし、イエス様は、そこに神のみこころを見ました。そこに御父の願いが置かれているのを見ました。それで、従われたのです。へりくだりの道です。

キリスト者はむしろ、「すべての良いわざを進んでする者」となりなさいと命じられています。イエス様は、一ミリオン行くように強いられ、一緒に二ミリオン行きなさいと命じられました(マタイ 5:41)。ヨセフのことも思い出してください。彼は不条理に監獄に入れられました。しかし、主がともにおられました。そこで、良い行いをしていたので、監獄の長が彼を信頼して、鍵まで渡して、他の囚人の世話までさせたのです。不条理に見えるようなところでも、その限られた範囲で、良い行いをしていく自由を用いるのです。

進藤さんの例を使うことが多いですが、彼はしばしば、東京拘置所に行きます。死刑囚に会うためです。すでにキリスト者になって、心が回心している人たちもいます。なぜ、死刑にするのか？という疑問を彼は抱いています。けれども、今の死刑制度があることを知っています。その限られた中で、最大限、できることを行っているのです。たとえ死刑制度に個人的には反対でも、その制度の中でできることを進んで行っています。

² また、だれも中傷せず、争わず、柔和で、すべての人にあくまで礼儀正しい者となるようにしなさい。

これも、クレテ人の特徴でした。自分に気に入らない人がいれば、いとも簡単に中傷します。争うのが好きです。けれども、中傷が、悪魔から来ていることを私たちは前回学びましたね？どんなに自分が気に入らなくとも、歯向かうのではなく、あれこれ無いことをあるかのように根拠のない非難をするのではなく、主にさばきを任せて、自分は柔和な姿勢を貫くのです。イエス様は、柔和な者が幸いであり、地を受け継ぐと言われました。柔和になれば、損をするのは世の中です。けれども、主にあって取られるのであれば、取られてもかまわないと信じます。主こそが、自分を豊かにしてくださいと信じます。そして事実、柔和な者に多くを主はお任せになります。

福音は、すべての人のために与えられています。ですから、私たちは、自分と考えが合わない人がいても、そりが合わないと思っても、それでも、すべての人に神によって救われる必要があるならば、キリストを示していく必要があるのです。それで、すべての人に礼儀正しいものとなるようにしなさい、とパウロは勧めているのです。

ところで、服従する、従うということは、私たちの肉は気に入らないものです。自分にとって正しくないと思うこと、不条理に思われることが起こると、まずは反発して、反抗したくなります。それから、今、起こっていることを自分の頭の中で、いろいろ分析しようと思います。これは、こういうことだろうとか、これは、あれが起こったからこうなったのだ、とか。そうしているうちに、主のみこころがわからなくなってくるのです。こうした状況にいるのは、主が何かをしておられるのだと信じます。そして、今、何が起こっているかわからないけれども、主にお任せします。その中で、知恵が与えられて、みこころにかなうことを行うことができるのです。

2A 神の憐れみによる救い 3-7

1B 御霊の洗い 3-5

³ 私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快樂の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。

3 節から 6 節に渡って、パウロは神の豊かな福音を語り、ここ 3 節にあるように、以前の自分たちの姿を語ります。それから、神が一方的に憐れんで私たちを救ってくださったことを語ります。そして、将来の約束を語っています。2 章でも、同じように、神の恵みによる福音を語りました。

「2:11-14 実に、すべての人に救いをもたらす神の恵みが現れたのです。12 その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、今の世にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、13 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています。14 キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。」神の恵みが現れました。以前は、不敬虔とこの世の欲の中にいました。けれども、キリストがその不法から贖い出してくださいました。それで今、選びの民として良いわざに熱心になっています。そして、祝福に満ちた望み、主の栄光ある現れを待ち望んでいるのです。

3 節では、以前の姿を語っています。「**私たちも以前は**」と言っています。クレテ人の姿はほんとひどいものですが、しかし、自分たちも以前は、さほどの差はなかったということを語っています。私たちは、世の姿を見ていかに堕落しているかを見てしまいがちですが、自分がどうだったのかを思い出し、自分がどうしようもないのに、それでも主が恵みによって救われたことを思い出す必要があります。

一つは、「**愚か**」です。自分は知っていると思い込んでいますが、あまりにも明らかな神の知識を意図的に拒んでいるので、それでわかるものもわからない、思いが暗くなっている状態です。その愚かさから、「**不従順**」になっています。神に従おうとしません。そして人に対しても礼儀を失するようなことをします。そして、「**迷って**」います。本来あるべき道を歩んでないので、どこに自分が

進んでいるのかもわからないで、日々を歩んでいます。

そのために、「いろいろな欲望と快樂の奴隷」になっています。自分が何のために生きているのか、人生の指針がないので、自分の心も沸き起こってくるものに、そのまま従っています。これがいいなと思ったら、それを行います。そして楽しければよいのだとして、楽しいことをしていきますが、その行きつくところが虚無であり、死であることを知りません。

そして、クレテ人には顕著でしたが、人であればだれもが持っているもの、「悪意とねたみのうちに生活」しています。SNS には悪意ある発言が数多くあります。ひどい場合は警察が調べますが、捕まると、何でもない普通のように見える人です。心の中にある欲望にそのまま満たされて、悪意と妬みの中に生きるのです。そして、「人から憎まれ、互いに憎み合う者」であります。なんという、悲しい生活、人生でしょうか。悪意と妬みの中に生きていれば、人から憎まれるのは当たり前です。そして、被害者意識だけを募らせて、自分自身も憎しみの中に生きます。

⁴ しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛が現れたとき、

ここに福音があります。福音の始まりは、この接続詞「しかし」です。ロマ 3 章では、義人はだれもおらず、すべての人が神のさばきに服することを断言して、それでパウロは、「しかし今や」と言いました。「3:21-22 しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。」エペソ 2 章でも、私たちが罪の中に死んでいて、肉の欲の中に生き、神の御怒りを受けるべき子らだったと言って、それから、「2:4-5 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」自分がどんなであっても、神は「しかし」から始めて、ご自分の憐れみのわざを行われるのです。

「私たちの救い主である神のいつくしみ」が現れました。これほど人々に憎まれる、だれからも嫌われている者たちです。しかし、救い主である神は、そのような者たちに慈しみを示されます。イエス様が福音書では、「かわいそうに思う」という言葉が多くあります。だれもがいやがり、嫌う者たちに、本来はそのような姿ではないはずなのに、という思いをもって、憐れんでくださるのです。

そして、「人に対する愛」です。いつくしみは神のご自身の性質です。それが、具体的に、人に対して愛の行いによって示されます。イエス様が人となられて、それで嫌われている人に愛の行いとしていつくしみを現しておられました。ツアラアトを患った人を触り、清められました。悪霊に取りつかれている人を解放されました。罪人や取税人と食事をされました。取税人ザアカイの家に、ご自身であえて入られました。放蕩息子を受け入れ、接吻する父は、そのやりたい放題のことなどおか

まいなしに、両手を広げて受け入れました。

人は、自分のうちに受け入れられるか、そうでないかの基準を設けます。それで、受け入れられるように生きていきます。しかし、心は、からからです。イエス様は、そうではありません。神が慈悲深いから、だからよくしてくださるのです。

⁵ 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。

午前礼拝でじっくりお話ししましたが、神がもつぱらご自分の憐れみで、私たちを救われたのですが、それは、聖霊の働きによります。聖霊による再生ですが、これは私たちが霊的に死んでいたことを意味しています。私たちがどんなに努力したところで、死んでいる者が何をしても死しか生み出しません。ですから、神が再びいのちを与えて下さないかぎり、生きることはできないのです。

そもそも、神は、ご自分の息、すなわち霊を人に吹き込まれて、それで人は生きるものとなりました。人が神から離れて、死んでしまったのですが、再び神の御霊によるいのちよってのみ、生きることができます。人の血筋でも神の子どもになるのでもなく、意欲によっても無理で、人の意志によっても無理です。ただ、神によって生まれることよってのみ、義と認められるのです。

次に刷新の洗いです。罪と不義によって汚れてしまった身を、どのようにして洗い清めることができるのでしょうか？聖書には、血による清めがかかれています。これは動物のいけにえがありました。完全に罪を取り除くことはできません。けれども、神ご自身が肉を取られて、そのからだから流れる血、キリストの血潮が清めます。そして、神の御霊です。この方の御霊によって、人は良心から洗い清められます。その清められた良心によって、神の愛を知り、その愛に応答して、神に心から従うことができるようになったのです。

そしてパウロが、「私たちが行った義のわざによってではなく」と、強調しているところが大事ですね。争い、妬み、議論をふっかけている者たちが教会にいましたが、彼らは律法を強調していました。けれども、自分たちの義によっては、何も救いを達成できないことを知りません。むしろ、妬みや争い、そしりという、肉の行いの実、醜悪で、腐乱した実しか生み出していないのです。私たちが、自分たちの義を持ちだしたら、どんなことになるか？を知っていかないといけません。

2B 恵みによる義 6-7

⁶ 神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

聖霊の豊かな注ぎは、旧約時代にはアロンをはじめとする祭司に、油注がれるところで表していました。少しの油を数滴、たらしたのではありません。「詩 133:2 それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。」油を豊かに注ぐのです！

そしてパウロはここで、「救い主イエス・キリストによって」注いでくださったと言っています。イエスご自身が水のバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のようなかたちで降りてこられたことを思い出してください。その時から主は御霊に満たされて、力ある働きを行われました。そして今、主イエスの名によって、信者たちに聖霊が豊かに注がれます。イエス様は、御霊が注がれることを、生ける水の川が、腹の底からあふれ流れるのだとして宣言されました。

この御霊の注ぎの中に、イエス・キリストの豊かな恵みがあるのです。私たちが、イエス・キリストについての教えを聞いて、それが自分のものだと知って、この方の行われたこと、十字架によって、はじめて自分の罪が赦されていることを、私たちは知ります。ガラテヤ人たちに、パウロがいました。「ガラ 3:1-2 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」御霊の働きによって、ガラテヤ人には目の前に、十字架につけられたイエス・キリストが描き出されたということまでが起こっていました。

⁷ それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みを抱く相続人となるためでした。

私たちは、キリストの恵みによって義と認められていることを、しっかりと知るべきです。私たちの行ったこと、その罪をすべてご自分のものとして背負ってくださいました。そして、ご自分の行われた正しいことをもって、私たちに覆ってくださいました。すべての罪はご自身に帰し、すべてご自身が行われたことを、私たちにくださったのです。キリストの恵みによる義です。

そして、キリストにある義があるからこそ、永遠のいのちがあります。そして、よみがえって、神の前に出るときに、決して自分の罪を宣告されることなく、豊かに神の国に入れてくださるのです。そして、神の子どもとして、相続もいただきます。御霊は、この約束の保証です。「Ⅱコリ 1:21-22 私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。」御霊が豊かに注がれると、どれだけ、永遠のいのちの望みと、御国の相続の保証が確かにされます。

3A 分派への戒め 8-11

このように、御霊はキリストの恵みを豊かにしてくださいますが、逆に言えば、御霊を持たない者

たちは、それに逆行するを行います。御霊がおられるところには、恵みと一致があります。けれども、そうでない人は御霊によって満たされていませんから、その限りなく枯渇した心から、人々にかみついてきます。

⁸このことばは真実です。私は、あなたがこれらのことを、確信をもって語るように願っています。神を信じるようになった人々が、良いわざに励むことを心がけるようになるためです。これらのことは良いことであり、人々に有益です。

御霊によるキリストの恵みは、ことごとく攻撃されます。肉の誇りによって行きたい人には、自分には死を宣告されるようなものですから、御霊の人たちを迫害するのです。ですから、そうした者たちがいると、自分の思いにサタンが攻撃をしてきます。恵みの福音だけで本当にいいのだろうか？と思うのです。何かをしないといけないのではないかと思います。そこでパウロは、「このことばは真実です。」と念を押しているのです。

そして、確信をもって語るように願っています。どちらだかわからないという形で語るのではなく、真実なのだから、確信をもって語るのです。「I テサ 1:5a 私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。」反対者がいても、それでも、しっかりと語ります。

そして次が、テスへの手紙全体でパウロが強調していることです。この恵みの福音が、「良いわざに励むことを心がけるようになるため」ということです。神の恵みがあるからこそ、人々は良いわざに励むようになるのです。恵みを強調しすぎると、行いに励まなくなるというのは偽りです。神の恵み深さを知るからこそ、私たちはへりくだって、主のわざにかかわります。主がしてくださったことを顧みれば、自分をすべて献げていこうとするのです。

パウロが、自分のことを次のように表現しています。「I コリ 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」不道徳な女もそうでしたね、イエス様がパリサイ人シモンに言いました。「ルカ 7:47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」神の恵みを知った者が、多く愛して、多く働くのです。

そして次に、敬虔な教えに反して、教会の中で違ったことを教えているような者たちに対峙するように教えています。

⁹ 一方、愚かな議論、系図、争い、律法についての論争は避けなさい。それらは無益で、むなしなものです。

テモテが受けていた挑戦と、テトスの受けていたものは似ています。律法の教師だと称しながら、律法について何も分かっていない者たちです。テトスに対して、「1:10 実は、反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多くいます。特に、割礼を受けている人々の中に多くいます。」と言っていました。ユダヤ人の中に、そういった惑わす者たちが多かったのです。自分がユダヤ人だから、あたかも自分たちこそが神の知識があるという主張をしていたのでしょう。だからこそ、若手の牧会者には大きな重荷となっていました。テモテは、母がユダヤ人ですが、テトスに至っては両親とも異邦人ですから、なおのこと圧迫になっていたことでしょう。

教会の中には、必ずこのような者たちがいます。素朴な疑問と、議論のための議論は違いますが、教会の中には必ず、議論のための議論をしたがる人たちがいます。無益で空しいと、パウロは言っていますが、もう理由は分かりますね。その言葉について、何か良い行いの実が結ばれているか？と言ったら、そうではないのです。敬虔な教えなのか？それと知識を得て高ぶらせるだけの教えなのか？私たちはよくよく吟味する必要があります。

¹⁰ 分派を作る者は、一、二度訓戒した後、除名しなさい。

教会の中で、自分が違った教えを持ち込んで、人々にもそれを聞かせて分派を造り出します。分派は、罪です。一度、二度、訓戒してもいうことを聞かなければ、除名します。分派は、他の道徳の罪とは異なり、自分がいかに正しいかを主張するので、多くの人を罪であると見なしにくいです。意見の違いであるとか、妥協点があるとかみなしてしまいます。けれども、ある意味で、他の道徳の罪以上に深刻でしょう。道徳の罪ならば、個人で犯しています。だから、その人が悔い改めば、その傷は癒されます。しかし分派の罪は、すべての人を巻き込みます。コラの反乱のことを思い出して下さい、彼らは、生きたまま陰府に落とされました。それほど神は怒っておられたのです。

現代では、容易にインターネットで、いろいろな情報を手に入れることができ、自分自身が聖書を読み、霊的な鍛錬を受けて、それで得た知識ではなく、ただ自分の高ぶりを肥え太らせる教えを積み上げて行くことができるのです。そういった、知識だけの人たちに気を付けてください。いかにも霊的に聞こえます。すばらしく聞こえます。けれども、パウロがテモテにも、テトスにも何度となく語っていたように、神の恵みの福音があって、それが敬虔さを生み出すのであって、それ以外は偽物なのです。

¹¹ あなたも知っているとおりに、このような人はゆがんでいて、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。

ゆがんでいるとパウロは言っていますが、これが人間の哀れなところです。自分で自分を痛めつけているというか、悪いと知りながら罪を犯しています。もっとも惨めなのは、議論をけしかけている本人でしょう。

4A 働き人の旅 12-15

手紙も最後になっています。仲間の働き人について語っていきます。

¹² 私がアルテマスかティキコをあなたのもとに送ったら、あなたは何とかして、ニコポリスにいる私のところに来てください。私はそこで冬を過ごすことにしています。

アルテマスについては、この箇所しか名前が出てきません。ティキコは、パウロの第三次宣教旅行の一行の中に、テモテと共に名を連ねています。エペソ人への手紙と、コロサイ人への手紙をローマから持っていった人でもあります。この二人を、クレタ島にパウロが遣わしています。なぜなら、テスと交代するからです。テスに、ニコポリスにいるパウロのところに来てほしいのです。

冬になると、船での移動ができなくなるので、同じところに留まります。ニコポリスに滞在することに、パウロが決めていました。ニコポリスは、マケドニアの北、東のエーゲ海のほうではなく、反対の、イタリアとギリシアで囲まれたアドリア海沿いにあった町です。パウロが、ローマ人への手紙で、「私はエルサレムから始めて、イルリコに至るまでを巡り、キリストの福音をくまなく伝えました。(15:19)」と書きましたが、ニコポリスは、イルリコの方面にある町です。使徒の働きでは、パウロたちがそこに行ったことは書き記されていませんが、手紙の中ではこのように書かれています。

パウロはテスに、「何とかして」と言っていますね。テスにとって、いろいろしなければいけないこと、務めがあることは分かりながらも、来てくださいという意味です。そのまま何となく続けていたら決してニコポリスへの旅はできないでしょうが、そこをしっかりと準備しなさいということです。

¹³ 律法学者ゼナスとアポロが何も不足することがないように、その旅立ちをしっかりと支えてあげてください。

律法学者とありますが、ゼナスという名がギリシア名なので、ユダヤ人の律法ではなく、いわゆる法律家のことだと思います。そしてアポロは、あのアポロです。エペソで雄弁に語り、プリスキラとアクラが、もっと正確に説明して、それからアポロがさらに大胆に語り始めました。それから、パウロが建て上げたコリントの教会に行きました。この二人がおそらくは、パウロから、テスへの手紙を携えてクレタ島に来たのだと思います。そして彼らは今度は違うところに行きます。その旅立ちを、しっかりと支えてあげてくださいと言っています。

¹⁴ 私たちの仲間も、実を結ばない者にならないように、差し迫った必要に備えて、良いわざに励むように教えられなければなりません。

これまで、テトスへの手紙で良いわざに励むように教えてきたのですが、肝心の宣教の仲間において、そのことがなされないのであれば、元も子もありません。多くの人々に良いわざを行っていても、肝心の仲間は軽んじてしまうということが、起こってしまいます。そのことを教えています。しかも、比較的長期的なことがらについては、貧しい人への施しなど、良いわざを行っていたでしょうが、彼らの旅費など、差し迫った必要のためにも備えるように教えています。

¹⁵ 私と一緒にいる者たちがみな、あなたによろしくとっています。信仰を同じくし、私たちを愛してくださっている人たちに、よろしく伝えてください。恵みがあなたがたすべてとともにありますように。

パウロのそばにいる人々からの挨拶です。それから、パウロは、テトスの近くにいる人々、兄弟たちが、自分たちと同じ信仰を持ち、かつ自分たちを愛してくれていることを知っていました。自分たちが愛されていることを知るのは、大切ですね。福音のために共に働く者たちが、互いに愛していることが伝えられることはとても幸いです。

そして、他の手紙にもある最後の言葉、「恵みがあなたがたすべてとともにありますように」であります。手紙が恵みの挨拶から始まり、恵みで終わります。神の恵みの手紙と言ってもよいでしょう。私たちにそれだけ、恵みが必要であることを教えています。